論文要旨

貨幣サーチ理論の研究

橋本壮広（経済学部３年）

指導教員：穂刈享

要旨

本論では、近年注目を浴びている貨幣サーチ理論に焦点を当て、その歴史や発展過程、貨幣サーチ理論で重要な論文である Lagos と Wright が 2005 年に書いた"A Unified Framework for Monetary Theory and Policy Analysis"の解説、Nosal と Rocheteau による"Money, Payments, and Liquidity"に従った信用取引の理論の解説、流動性市場に貨幣と債券を導入したモデルの試みについて扱う。貨幣サーチ理論の発展過程や歴史については、Peter A. Diamond・Dale T. Mortensen・Christopher A. Pissarides の 3 氏が 2010 年にノーベル経済学賞を受賞した労働サーチの初期の取り組みから始まり、貨幣サーチ理論の創世期に欲求の二重一致を的確にモデル化した Kiyotaki and Wright による"On Money as a Medium of Exchange"や貨幣サーチ理論を政策分析に応用した Lagos と Wright の論文までの経緯を説明している。また Lagos と Wright の論文の解説では、元論文の展開に従い、より明快な議論が出来るように注意している。更に本論ではモデルの解説だけではなく、そこから生じる政策の内容について言及し、Lagos と Wright の論文の理論が現実的に日本において適合できるかどうかについて実際のデータを用いながら論じる。信用取引の理論の解説では、Kocherlakota の"Money Is Memory"で議論された貨幣の重要な機能の一つである信用の記録としての役割に着目し、信用が完全である場合、信用が外部環境によって崩れる場合、信用が内生化され取引記録装置が経済に与えられた場合、取引のパートナー関係が存在する場合の 4 つの場合に焦点を当て、それらを簡単な理論や表現を用いながら議論している。最後に流動性市場に貨幣と債券を導入したモデルでは、Geromichalos 等による"A Search-Theoretic Model of the Term Premium"のアイデアに基づき、先に解説した Lagos と Wright の枠組みを参考に新たなモデル作成の試みを紹介する。